

---

# ユーフォニウムと巫女

詩之葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユーフォニウムと巫女

### 【Nコード】

N4641N

### 【作者名】

詩之葉

### 【あらすじ】

ちよつとした好奇心で訪れた吹奏楽部。そこはとても個性的な人たちに溢れた学生のオアシスだった。笑いも涙も恋愛も、感じるままそしてありのまま綴っていくかと思いい立ち、エンジン全開の部活コメディーここに見参。吹奏楽知ってる人も知らない人も、きつと楽しめると思います。（というか、かく言う私が新参なんですけどね）青春時代の高校生を卒業し、子どもと大人の狭間、大学生へ。少し大人びた少年少女たちの大人げないのんびりした日常をお楽しみください。

## プロローグ

「ユーフォニウムと巫女」

きつかけなんてものは、ほんの少し抱いた好奇心だけでも生まれるものだ。

ヒトは不思議なもので、いろんなモノを知りたがるところがある。ただの動物なら、まあよくは判らないけれど、普通は食べ物位にしか興味ないんじゃないだろうか。

ヒトは生きるために必要なモノ以外にも、深く繊細な好奇心を抱く。

スポーツ然り、昆虫然り、小説然り…。

音楽然り。

その種類は星の数ほどあるし、自分の知り得ているモノだけでは星座のひとつも紡げないだろう。

しかしそんな天文学的数字の確立で、僕を駆り立てるひとつの好奇心が生まれ、それは僕を此処へと誘った。<sup>いさな</sup>

ロマンチストという肩書を騙って言うならば、これは『運命』というやつだろうか。

…うん。騙って言った言葉だとしてもこっぴどく恥ずかしいものはこっぴどく恥ずかしい。

僕はやっぱり、運命なんてものを信じる柄ではないのかもしれない。

しかし、ふとそんなものを信じてみたくなるような、そんな日だった。

## プロローグ

学生食堂の2階。吹き抜けから食堂を展望できる広場に部屋がある。その扉の横に、丈夫そうな板でできた看板が立てかけられている。それには大げさな書体でこう彫られていた。

『學内應援団吹奏楽部』

まず、約2文字程読めない。次に、書体からしてもものすごく厳格な雰囲気漂っている。最後に、部屋の明かりがついてないってことは、誰もいないんじゃないだろうか。

以上をもちまして、今日の僕は踵を返し帰りのバスまで図書館で過ごそうと思い立ちました。

しかし振り返ったその先で、階段を駆け上がってきたばかりと思われる女子が、最後の段に片足を残したままぽけっとこちらを見ていた。

「えと、君一年生？」

「え、あ、はい」

「そうなの？ 部活決まった？」

「いえ、まだ…」

そう言いかけた瞬間、彼女ははちきれんばかりの笑顔を咲かせた。

「じゃ、ここにいて事は吹部希望だよね？ だよね？」

「ええ、まあ、一応…」

「ヨシ！ 新入部員一名確保お！」

階下の食堂にひと思いに叫ぶ彼女。そして、慌ただしく階段を駆け上がる音。口々に何かを言いあいながらその人たちは駆け上がった。

「内藤ちゃん！ 新入部員でだれ？」

そう言ったのはちよつと太った体系の優しそうな男子。髪を茶色に染めてはいるが、見るからに優しそうな人だ。

「男子！？ 女子！？」

そう言ったのは細身で背の高いなかにイケてる男子。イケてるかどうかは、感覚のズレている僕が言っても信用はないだろうけど。

「この子この子！ ねえ、この子もそうだけど、やっぱり今年の一年男子、イケメン多くない？」

「うん、確かに！」

そうだろうか、と苦笑いする。そんな褒め言葉をいただけるほどの面なら、もつといい思いして充実したリアルを送れている筈だ。うん。きっとそうだ。只今自虐モードに移行中。

「ねえねえ、名前は？」

「ひがやま比嘉山 あきひ彰です」

「よし、じゃあクガヤマ君」

「ヒガヤマです」

「部室ん中であれ書こう！」

「あれ？」

「入部届！」

細身の男子に引つ張られるようにして、明るくなった部室らしき部屋へと連行された。

部屋の中は、汚かった。真ん中に机があるにはあるが、書類と筆記用具が山積みになれてとても使っているようには思えない。部屋に入ってすぐ左に、パーカスが使っ楽器 バスドラ、サッシン、ビブラフォン等々 が押し込められるように並んでいた。一番奥のティンパニーなんか、ウィンドチャイムがかぶさってなかなか信じられないような光景になっている。言うなればパーカスゾーンである箇所に隣り合うかのように、木管、金管の順にパートごとに分けられた楽器棚があった。

あれは、もしやトロンボーンか？ ケースに入ってるからどうと  
いうわけでもないが、ベルが棚からはみ出している。その下にある  
チューバも、どでかいベルをこれでもかとはみ出させている。そし  
てそれらと真ん中の机との距離はわずか20cm弱といったところ  
だ。おいおい。どうやって出し入れしてんのさ。

部屋のあちこちにツツコミを入れていると、内藤ちゃんと呼ばれ  
ていた女子が一枚の紙を目の前に突き出した。入部届、と上部に書  
いてある。

「名前書いてくれるだけでいいから！」

「ペンある？ 机のうえからテキトーに取ってって！」

「ヒガヤマってそう書くの？ 初めてみた」

この人たちの落ち着きのなさといったら、もう。絶えず苦笑いを  
浮かべ続けているうちに、頬が痛くなってきた。名前を書くだけな  
のに、何故か時間がかかる。

「あ、じゃあ俺ら勧誘の続きしてくるから！　その紙机に置いといて！」

「ちゃんと乗せといてねー！」

そういつて三人は嵐のように部屋から出ていき、階段のステップを踏みならして去っていった。呆氣にとられるという言葉が今まさに、ぴったりと当てはまった。そして、手元の入部届を今一度見かえす。

もう文字じゃないな、これ。

すさまじい筆記体となった自分の名前をぐりぐりと塗りつぶすと、床に座り込んでいざ書き直そうとペンを構える。

その時。

それは静かに聞こえてきた。

静寂だけが生むことのできる微かな奇蹟。

耳を澄ますことで、ようやく聞くことが出来た。

穏やかに、かつ滑らかに流れる旋律。

身体を包み込むような柔らかい中低音。

やまびこのように楽しげに、波音のように優雅に、風のように爽やかに。

歌が響いていた。

いや、歌ではない。

これは楽器だ。

楽器の奏でる曲だ。

しかし、そう聞き違えてしまうほど、鮮やかな曲のイメージが頭の中で溢れる。

誰が奏でているんだろう？

ペンと紙を床に置き去りにし、部屋を出た。歌が聞こえる方を見

渡す。さっきは気付かなかった扉がもうひとつ、部室の横にあった。扉には紙が張り付けてあり、『部活・サークル』と書いてあった。

倉庫かなにかだろうか？

ゆっくりと扉を開け、中へと入る。

中は図書室の棚のように、木でできたロッカーが整然と並んでいるような部屋だった。そして、部屋の奥に大きな窓があり、その前にちよつとしたスペースがある。そこに、人影が見えた。歌も、その辺りから聞こえてくる。ゆっくりと部屋を進む。

窓際に近づき、その人を目にした。

彼女は歌っていた。

手にした楽器とともに。

テューバに似ているが、それよりも小柄な金管楽器を手に、旋律に合わせてゆつたりと体を揺らしながら彼女は歌っていた。

ゆるやかにウェイブのかかった茶髪が、肩にかかってまるでヴェイルのように見える。

うららかな春に似合う白を基調にした服が、窓から射す光を反射して綺麗だ。

彼女は目を瞑り、体を揺らし、学校の校舎を望む窓に向かって一人歌い続けていた。

ずっと、聞いていたかった。

歌に包まれていたかった。

今までに聞いた事もないような、優しい、温もりのある音色。音を楽しんでいる。

そう、彼女は音を楽しんでいるのだ。

そして、音とともに踊っている。

そんな彼女をずっと眺めていたかった。



まるでガラス玉を飲み込んだような、そんな気分だ。

そして、歌はフェードアウトしながら終わりを遂げた。  
彼女は楽器から唇を離すと、ふうと小さく息を吐いて、呟いた。

「……。おなかすいたあ」  
「へ？」

思わず口からそんな一言が漏れ出していた。慌てて口を抑えるが、時すでに遅し。くりんとした丸い瞳がこちらを向いていた。

目が合う。

もう、一歩も動けなかった。

そして彼女はみるみるうちに頬を赤く染め、うつむいた。  
いけない。

雰囲気浸っている場合ではない。

勝手に近づいて勝手に見て勝手に聞いていたのはこの僕だ。

「ごめんなさい。ただ、音が聞こえたから誰かなあと……」  
「はあ」

「あ、そ、その楽器っ！　なんていう名前なんですか？」

取り繕っているのがモロバレだ。

「これ？　ユーフォニウムって言うんだよ」

「ユー……え？」

「ユーフォニウム」

ユーフォニウム？

友人に教えてもらった予備知識の中に、そんな楽器あったっけ？  
彼女はその金管楽器を赤子を抱きかかえるかのように持ち、首を

かしてこちらを見ている。

自分の頬が熱くなるのが判った。

おっとり美人、とでも言うのだろうか。

穏やかだがしっかりした物腰で、彼女は楽器を片し始めた。

手を休めることなく、彼女は尋ねてきた。

「間違つてたらごめんなさい。もしかして、さっきマサミが叫んでた新入部員て君？」

「は、はい、そうです」

「やっぱり！」

ケースの蓋を軽やかに閉じると、屈みこんだままこちらを見上げぱつと笑った。

うん。

この人、とんでもなく美人だ。

「何吹くの？ それとも打楽器？」

「いや…、実は吹奏楽は全くの初心者なんです」

「そうなんだ」

じゃあ、と彼女は一度閉じたケースを再び開き、ユー…なんちゃらを取り出した。

彼女はゆつたりと僕に近づくと、その楽器を手渡した。

途端、両腕にかかる確かな重み。

「うお。なかなか絶妙な重量感ですね」

いったい何処の素人評論家だろうか。

「吹いてみる？」

「え？」

「私が使ってたマッピでいいなら」

マッピ。

マウスピース。

これか。

…ってことは？

「本当にいいんですか？」

「うん」

こんな年にもなってこんな事でドギマギしているようじゃ格好悪いのだろうが、なにぶん状況が状況だ。

この人、わかって言ってるのだろうか？

兎にも角にも、どうやら期待の眼差しに弱い僕は、マウスピースに口をつけ、ひと思いに息を吹き込んだ。

ぶっつおおおおおお

あら、汚い音。

「ははは。面白い」

「面白って…」

「うん。最初は誰だってそんなもん。練習すればどの楽器もある程度吹けるようになるよ、きつと」

微笑む彼女にそう言われると、本当に出来そうな気がして困る。

そんな心地の良いひと時を打ち砕くように、この部屋の扉がけたましい音を散らして開いた。

「真宵まよいちゃん！ 居るー？」

「はい」

「東風先生とうふうせいのところ行こう？」

「わかったー。今行くー」

そう言う彼女がひょいと僕の手から、…、金管楽器を取り上げケースにしまいこんだ。そしてケースを両手で運びながらぱたと靴を鳴らして部屋から出ていってしまった。

日々を淡々とこなし、その延長で辿りついたようなこの場所で、どこにでも転がっていきそうな話をそのまま切り出したかのような時間を過ごしてしまった。

数えてみれば成人と認められる一歩手前まできていた。  
時間にして599184000秒。

そのどの瞬間にも、今のような時間は存在しなかった。

あるとしてもそれは他人の話だった。

あるいはどこかの小説のなかでの話だった。

空想。妄想。夢物語。

自分にそんな浮かれた話は似合わない、そんな風に悟った時期もあった。

現実にはない、そう思っていた。

しかし今一度、淡い期待を抱いて日々を過ごしてみたいと思わせた、そんな出逢いだった。

そしてその翌日から、僕はここの吹奏楽部の部員としてその日々を送り始めるのであった。

「何書いてるの？」

「うわあああー！！！！」

慌てて手帳を鞆にしまい、振り向く。

真宵先輩が金色に光るユーフォニウムを手に僕を見下ろしていた。背中に隠した鞆を見ようと頭をうろろらせているが、それに合わせて体を動かし視線をうまくブロックする。

そして、諦めたのか、覗き込みをやめると先輩は隣の座席に腰を下ろした。

「けち」

「…なんとも言うってください。でも見せませんからね」

けち、と先輩はもう一度言って口を尖らせた。

「じゃ、練習始めるよ」

「はい」

僕は応えようと、椅子の横、床に立てられた銀色のユーフォニウムを膝の上に乗せる。

メトロノームのネジを巻き、ストップパーから針を外す。聞き慣れた、カチカチとリズムを刻む音。

練習開始だ。

## プロローグ（後書き）

自称「半ノンフィクション小説」。暇なとき、他の小説に行き詰ったとき等に、日常に溢れかえってる小さな面白いことを、この話に詰め込めればなと思ってます。末永くお付き合いください！

## 今日のみなさん

「今日のみなさん」

日常に溢れかえっているという表現は、ほんとに適している表現なのだろうか？

どうも僕には、徒然と過ぎていく日々をひとまとめに括る『日常』という言葉が気に食わない。

同じ日は2つとないのだから。

溢れかえっていると言ったって、それがどの日かに偏っている事だつてあるかもしれない。

そんな言葉を作られては、とある1日に失礼じゃないか。

同じように学校へ赴き、同じような場所で同じような事を繰り返す…。

でもそれはその日の昨日と全く同じ行動だろうか？

一言一動寸分変わらず同じと言えるだろうか？

同じ日なんてひとつもない。

これは単なる屁理屈だ。

屁理屈で語られたって、楽しくない。

しかし、こう考えればきっと楽しい。

昨日と違った「楽しい」を、『今日』見つける。そうすれば、昨日とは違う日を過ごせたとと言えるんじゃないだろうか。

「はあ。おなかすいたあ」

そう言つて、食堂に並んだ長机に突つ伏する真宵先輩。自然過ぎるその行動に、思わず頬が弛む。心地よい時間を生み出してくれる人は、とても貴重な存在だと思ふ今日この頃。

我らが學内應援団吹奏楽部は、今日もピースフルでワンダフルに活動中だ。

此処の大学に音楽室はない。

だから、部室のあるラウンジの下、学生食堂が僕ら吹奏楽部の練習場所。

講義のある日は午後6時から。土日は午後3時から。

食堂が配膳処を閉めた後から、ここはプラスチックバンドホールになる。春の陽気がホールを暖め、心地よい楽器の音色がそこに居る人たちの耳をくすぐる。

だから、今の僕はだいぶ眠い。

それも、ちよつと前に遅めの昼食を摂ったのが原因で、確実に睡魔の腕は僕を夢の世界へ引つ張つていこうとしていた。

今日は土曜日。

こんな天気の良い日に家でだらけているのもアレだなと思つて来てみたら、意外にも部員のほとんどが部活に顔を出していた。

真宵先輩と僕のいる場所から机を挟んで反対側。

そこでテューバを吹いているのはアリ先輩とユードイ先輩。

皆がそう呼んでいるので僕もそう呼ぶ。呼ばせていただきます。

アリ先輩は中学校からテューバを吹いていたらしく、真宵先輩曰くとても上手いとのこと。入部届を出した日に会ったふくよかな人が彼であるが、なんというか、吹いている姿がとても様になっていて格好いい。

ユードイ先輩は僕と同じで大学から。それも、今は職活の時期に備えるための期間だとかで、基礎合奏練習の時になるといつも遅れて顔を出すような多忙ぶりだ。それでも、休み ユードイ先輩にと



ってそうなのかは知らないが　の日にこうして練習に来ているのだから尊敬する。

ホールのド真ん中を陣取り、トロンボーンを手に特訓中なのは、ヤスフミとつかさんとトリニティ。

全員一年生。ほやほやだ。

しかし腕前は僕のそれとは比較にならない。

ヤスフミは九州の方の高校で、大編成クラスのバンドでファーストを任されていたという。寡黙だけれど、面白いキャラクターを持つ一面もある意外性NO.1の男だ。

つかさんは市民団体と部活のバンドを両立しながら過ごしていたらしい。周りからはバカとよくからかわれているが、それに準じる天然ぶりを時たま発揮することでも有名だ。

トリニティ、はあだ名。理由はよく知らない。実は本名も知らない。とにかく彼女も、よく分からないが、アリ先輩曰く「ヤバイ」とのこと。どうヤバイのかは全く不明。

ホールの入って左側の壁に向かってトランペットを練習しているのはヤツクル。

これのあだ名の理由は、いつもあの乳飲料をかばんに忍ばせているから。

腕前に関しては、何年かブランクがあるらしく、本人曰く「ヤバイ」らしい。

その理由もなんとなくわかる気がする。

同い年なのに年上のような風格を醸すヤツクルは、やたらと説教臭い。

そのくせ説得力が無い。

でもいい人。

ヤツクルの隣でフルートを高々と吹きならしているのは和明。かずあき

とんでもなく上手いのはド素人の僕にも伝わってくる。  
乱れない運指、途切れない旋律、そしてその音量に裏付けされた  
迫力。

彼も一年生というが、経験の時間を照らし合わせることで露わになる、積み上げてきたものの違いというのを見せつけられている気がする。

彼は大学から、何かしらの拳法を習い出したという。

練習後の談話中、怪しげなステップを繰り返す彼を何度かお見受けする。

彼らとは反対側の壁際でクラリネットを演奏しているのはルルと  
みいちゃん。

ルルは漢字では流れと瑠璃の瑠を合わせて「流瑠」と書く。とても綺麗な名前だと思う。

黒髪の似合う真正正銘の美少女だが、趣味嗜好がちょっと皆とズレていることも相まって、不思議少女という印象が濃い。

みいちゃんは、皆がそう呼んでいるから呼ぶのであって、とにかくそういうことだ。

女の子を「ちゃん」と呼ぶのは生まれてこの方初めてなので、少々戸惑っている。

でも名前を知らないのだから今はそう呼ぶしかない。

クラリネットを吹く前はオーボエを吹いていたらしい。

彼女はとても小柄だが、その静かな雰囲気と優しげな言葉づかいがとても大人っぽいのが印象的だ。

そして彼女らを教えているのはゆーゆー先輩ことユウカ先輩。

人一倍真面目な性格なのが初対面の時から伝わってきたが、実際のところとても優しく、おらかな人柄だ。パートの中で一番経験が長いので、一年の二人に先輩はあれこれ教えている真つ最中だ。

その手前でオーボエを吹いているのが浮石先輩。意外にも部活内

で唯一メガネをかけている先輩で、彼はよく居眠りをする事で知られている。そして実際、その現場をよく目撃する。今日は軽快なリズムでアラビアンな旋律を奏でている。休みの日には といっても今日は違ったのだが どこから持ちだしてきたのか、よくエレキベースを弾いている姿を見かける事がよくある。スラップを効かせているあたり、カッコいいベースをよく判っている人らしい。吹奏楽部としてそれが役に立つのかどうかは甚だ疑問だが。聞けば、吹奏楽部の楽器庫にはドラムスやギター、各種アンプ等も揃っているという。すごい。

その隣の長机を囲んでいるのはサックスパートの方々。

バリトンを吹いているのはマサミ先輩。アルトを吹いているのはタカミネ先輩。テナーを吹いているのはムっちゃん先輩。

マサミ先輩はとても個性的な人だ。話をすればその節々でいきなり大声をあげるし、練習中も時たま何故が発狂する。話の内容もだいぶ偏っていて、僕には何のことだかさっぱり分からない事柄が多い。とても言うておく。

タカミネ先輩はユーダイ先輩よろしく、大学からサックスを始めたというが、それ以外はあまり分からない。というのも、部活で顔を合わせる機会があまりないので、話をする機会もないのだ。あんなイケメンなら、武勇伝の一つや二つ持っているに違いない。隙あらば話をしたいとそのチャンスを探っているところだ。

ムっちゃん先輩は、坊主だ。といっても四六時中キャップを被っているので分かりづらいが。音楽知識がとても豊富な人で、スケールや音色の装飾 アーティキュレーションと呼ぶそうだ についていろいろと教えてくれる。サックスの演奏も見事なもので、練習中に調子がのったときは吹奏楽部とは思えないスイングでアドリブをかますので、よく合奏を指揮しているアリ先輩に一言申されていた。

2階のラウンジでパーカッションを練習しているのは、あみ先輩

とハルニレ先輩と大塚くと山ちゃん。

あみ先輩とハルニレ先輩　もちろんあだ名だ　は同じ高校の出身だという。でも話によれば、この大学に入るまでお互いの事を知らなかったというから驚きだ。世の中巡り合わせって本当に偶然なんだなとしみじみと感じた瞬間だった。

大塚くんはとてもお茶目な奴だ。しかしその人柄に全く合わない、威厳たつぷりのコントラバスを抱え、練習に臨んでいる。普段はマサミ先輩やアリ先輩とふざけ合って遊んでいるような印象しかないのに、そのどっしりとした弦楽器を手にした瞬間、人が変わったように真剣な面持ちになる。密かに、そんな切り替えができる大塚くんを僕は尊敬している。

山ちゃんは対してとても寡黙だ。かといってだんまりではない。話しかければ楽しげに話すし、冗談も言う。でもふと見れば音楽雑誌を読み耽っていたり、メトロノームを前に揺れる針をじっと見続けていたりしている。ムっちゃん先輩曰く彼はリズムオタクだそうで、実際彼の叩くドラムやティンパニーは当に弾むように正確な拍子を生み出していた。彼もまた大の音楽好きで、よく僕にその世界では著名らしいジャズドラマーやシンガーのPVを貸してくれる。

そして、僕は目の前で机に伸びている彼女を眺めた。

この人は真宵先輩。僕が吹奏楽部に入ろうと思うきっかけにワンブッシュを加えた人。

いちおう断っておくけど、僕が吹奏楽部に入ったのは、元々ギターをやっていて大学でも音楽に触れていたかと思いつたがこの大学の軽音楽部、名前はミュージック同好会とかそんなだったけどそのジャンルが自分の好きなそれとは一致していなくてたまたま聞いた吹奏楽部の演奏会がとても楽しそうだったからうんたらかったら…。

とにかく、僕の吹奏楽部デビューの始まりを支えてくれたのが真宵先輩だ。

先輩はなんと小学生の頃から親戚の影響でユーフォニウムに触れていたらしい。そしてとても上手い。練習の度に先輩の流れるような動作から生み出される音色を聴いていると、心が洗われるようなそんな気分になる。

ユーフォニウムは音が出やすいから簡単なんて言う人もいるらしいが、そういうシンプルなモノって応々にして奥の深いところがあるのではなからうか。少なくとも、今の僕には真宵先輩が歌うようには吹くことなんてできない。

個性溢れるメンバーだからこそ、飽きない。

心から楽しいをくれる人達がいる事が、なにより驚きだ。

こんな感覚は生まれて初めてだ。

部活で過ごした時間はまだまだ浅い。

でも、周りを取り囲むように満ちている楽しい音色を聴いていると、雲行きなど気にならなくなる。

ずっと触れていたいと思う。

音にも、心にも。

きつと、こんな感覚を味わえるのも、この4年間で最後なのだろう。

だからこそ、流れ落ちていく時をしっかりと握りしめておかなければ。

今を流れる一秒一秒を楽しまなければ。

そう。今楽しめる事は、今が一番楽しめるのだから。

初心者だからって憂うことはない。

未だ慣れないアンプシユアも、気がつけば自分のモノになっているはず。

運指だってギター程難解なものではない。

クサイ勢いを携えて上手くなってやろうじゃないか！

ぐー…

「あ」

真宵先輩がおなかに手を当て、突っ伏している頭を僕とは違う方へと向けた。

「先輩…。本当におなかすいてるんですね」

「…うん」

そう言つと、先輩は席を立ち、ふらふらと2階へと上がつていった。購買でいつものおにぎりでも買ってくるんだろっか。パークションの大塚くんが真宵先輩にからむ声を浴びつつ、眠気と格闘しながらそんなことをぼんやり考える今日この頃。

今日は土曜。

明日は基礎合奏の初日だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4641n/>

---

ユーフォニウムと巫女

2010年10月9日14時09分発行